

## Imagining (the Life on) the Other Side

向こう側(の人生)へ思いを馳せる

2017

アクト / ドローイング・インスタレーション

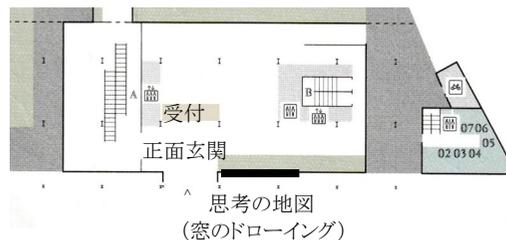
(ガラスに顔料マーカ)

約 800x300 cm

『グローバリゼーションのなかの不和』展, EHESS

(国立社会科学高等研究院、フランス・パリ)

グローバリゼーションにまつわる複雑な問題について公に考え、見つめることで、多くの人々が「自分ごと」として捉えられるよう試みるプロジェクト。パリ中心部にある国立社会科学研究機関において、大通りに面した中央玄関脇の窓の内側に立ち、グローバリゼーションについての考察を外に向かって鏡文字で書き記してゆき、巨大な「思考の地図」を拵げた。



ラスパイユ大通り

(上) 展示空間のフロアマップ、および作品の位置

(下) 大通りに面したEHESSの窓に日々増殖していく、一つの「思考の地図」



EHESS(フランス国立社会科学高等研究院)のプログラムの一環として開催され、学術研究と芸術の対話を通して、グローバル化時代の表現のかたちを問うことを目指した『グローバリゼーションのなかの不和』展のための作品。

アームチュア・エキスパートと欧州的観点の支配に対する異論の不在。非アカデミックで、欧州における移民の中で少数派の私は、そんな展示の文脈への違和感も含めて、自らの日々の経験を糧にグローバル化に思いを巡らした。パリの大通りの窓に内側から鏡文字で描くというアクトを通し、記念碑のように大きくとも、生き活きとして透き通り、手に届く、ひとつの「思考の地図」を人々の前に広げていった。

### 自前の論理、語法と境遇

私なりの論理と表現で飛躍と詩情をまとい、繁殖していく言葉の図解(ダイアグラム)。そこには、日本人でヨーロッパに長く暮らす移民という私のアイデンティティ、そして北極圏、トルコや南米などさまざまな社会での生活体験も映し出される。

### 複雑なつながりの一端を担う

展示はグローバル化の否定的側面のみ捉えるように姿勢を限定し、また研究者たちは作家からの(展示の本来の趣旨である)対話の働きかけに応じず、展示予算も自身の研究のみに当て、作家への予算はなし。多くの面で感じた展示自体の文脈への違和感も利用しながら、幅広く親しみある話題を織り交ぜ、相反するものも提示し、それらの多様な側面を見つめるよう心掛けた。多くの人がこの議論に近づき、言及される事象への(さもなくば気付くことがないかもしれない)自身の関わりを認識するきっかけに会えるようにと、世界や私たちの間でいかにものごとく複雑につながっているかを探究し、疑問を投げ続けた。

### 隔てるもの、繋ぐもの

「思考の地図」は一点から始まり、枝々がさまざまに伸び、結びつきあいつつ、樹木のように展開した。窓の内側から通りへ向かって鏡文字で描かれたその軌跡には、物理・地理的な世界のつながりという表面の向こうにあって、世界を隔てている別の要素、広い視野の欠如、価値観や倫理観への疑問が繰り返し現れている。

思考の地図は「日本の《国民食》としてのカレー」に始まり、さまざまな道を辿った：  
香辛料貿易、大航海時代と鎖国、人と植物の越境、七面鳥—その各地で異なる呼称と疎外されるアイデンティティ、植民地支配と土着化、エキソフォニーと訛り、宗教と信仰、搾取と道徳、多国籍企業と社会責任、医療観光とスーパー・フード、世界の中心と思考の地理学、など

